

## 宇治川先陣譚の時空

はじめに——論点の所在——

尾崎 勇

治承四年(一一八〇)八月に源頼朝は伊豆国で旗揚げをする。石橋山の合戦で敗退して安房に逃れ、東国武士を糾合して同年十一月には鎌倉に落ち着き、源氏一門をも含めた軍勢の統制を固めていく。『平家物語』巻第八は木曾義仲を大きく押し出し、寿永二年(一一八三)十一月、義仲が廟堂に介入して後白河院の御所の法住寺殿を襲撃した。その後、西国に落ちていった平家軍と和解するまでを描いている。後白河院は義仲排除の姿勢を明確した時局のもとで『平家物語』巻第九の前半では頼朝の派遣した弟範頼・義経の軍勢と宇治・勢多で争い、章段「義仲最期」へ及ばせていく。

『治承物語』を遺存しているのは『平家物語』諸本にうちでは屋代本と四部合戦状態であるわけだが、屋代本の方は巻第九が欠巻であつて宇治川での対戦を現在では窺えない。本稿では四部合戦状態(以下、四部本と略称)の巻第九の冒頭の章段「元暦元年年頭記事」に続く「宇治川」・「生ずきの沙汰」の二章段の要旨は、

鎌倉を出發するに際して、源頼朝に梶原源太景季は「生済」(名馬「生ずき」のこと。四部合戦状態では「生済」とあるので、以下この名称を用いる。)を懇望したが、結局、佐々木四郎高綱が拝領し、宇治川をはさんで義仲勢と対戦した。景季と高綱とが先陣争いをして、高綱が勝つた。そのことが鎌倉にも伝わり、頼朝は「執帳」(四部本に描かれているもので、具体的に如何なるものかは不詳)に書いた。

である。この物語を宇治川先陣譚と称する。宇治川先陣譚が生成した要因を、『愚管抄』と『将門記』そして和歌にも配慮して探ろうとするものである。

四部本の巻第七の冒頭は、

寿永元年壬刀正月一日、諒闇に依つて節会無し。十六日、踏歌の節会も無し。当代の御忌日たるに依つて、永く之を留めらるべし。

元暦元年の二年前の養和二年（一一八二年五月二十七に寿永に改元。一一八四年四月十六日に元暦に改元）元年正月一日より同年二月七日の一の谷での平家軍敗走と惨状を描いている。巻第七の諸本ともに、清盛が瀬戸内の要所として築いた風光明媚な空間の福原から平家一門が漂泊していく場面を巻末に布置している。『治承物語』を遺存している屋代本で見ると『伊勢物語』（巻九段）の本説取りの歌の修辭に則つて描いている。すなわち、在原業平が東国へ下向して武蔵国と下総国との境を流れている隅田川で、

平家八、日数フレハ、都ヲハ山河ノ程ニ隔テ、雲居ノヨソニソ成リケル。遙々來ヌト思ニモ、只甚セヌ物ハ涙ナリ。波ノ上ニ白キ鳥ノ群居タルヲ見テハ、彼在原ノナニカシノ、住田川ニテコト問ケム、名モムツマシキ都鳥哉ト哀ナリ。寿永二年七月廿五日ニ、平家都ヲ落ハテヌ。

（屋代本・巻七「平家一門落都趣西国事」）

見たことの無い嘴はと脚あしとが赤い白い鳥がいたので、渡し守に尋ねたところ「これなむみやこ鳥といふ」と聞いて、「名にし負はばいざこととはむみやこ鳥わが思ふはありやなしや」と詠んだので、船中の人々は共感したとの叙情的彫琢がこらされている。巻第八では木曾義仲が入京して生活感覚の違和により、廟堂の内外から響聲を買い、敗退していく模様が押し出されはじめる。義仲は後白河院とも対決して中央政界のクーデターを断行し、平家側との和解をなそうとするまでに至つてしまい、諸本とも哀感がしみじみと身にしみいる白眉の場面が寿永三年一月二十一日に「木曾最期」の章段なのであった。義仲は東国軍を突破して三条粟田口から東国へ脱出、関山に着いた時には七騎になつていた。その後を四部本でも、

今は今井四郎と主従二騎と成る。木曾、今井に押し並べて、「例ならず鎧の重く覚えけるは何かい」と言へば、

今井申しけるは、「御身も疲れさせたまはず、御馬も弱らず。何故にか今始めて一両の鎧を重しと思食され候ふべき。無勢に成りて候ふ時に、臆してこそ佐も候ふらぬ。兼平一人をば余の武者千騎と思食され候ふべし。とあつて、義仲が弱音をもらしたので叱咤激励して、その後、

内甲を相模国の住人石田小次郎為久に射られたまふ。(中略)「今は誰に合ひてか軍いんぐさ為べき。見よや、日本第一の豪の者の自害なり」とて、太刀を口に含みて、逆に落ちてぞ死にける。今井自害しければ、粟津の軍は留まりぬ。

であつて、義仲は射られてしまったので、乳母子の今井兼平と遂に馬から飛んで逆さまに落ち、太刀に貫かれて死んでしまったと描かれており、二人の心の結び付きが精彩を放っている。本章段は『愚管抄』別帖の安徳天皇の条に、

カ、ル程ニヤガテ次ノ年正月ノ廿日、頼朝コノ事キ、テ、弟二九郎ト云ヒシ者ニ、土肥実平・梶原景時・次官親能ナド云者サシノボセタルガ、左右ナク京ヘ打イリテ、ソノ日ノ内ニ打取テ頸トリテキ。ソノ時スデニ坂東武者セメ上ルト聞テ、義仲ハ郎等ドモヲ、勢多・宇治・淀ナンドノ方ヘチラシテフセガセント、手ピロニクハダテ、有ケルホドニ、ス、ドニ宇治ノ方ヨリ、九郎、チカヨシハセ入リテ川原ニ打立タリトキ、テ、義仲ハワツカニ四五騎ニテカケ出タリケル。ヤガテ落テ勢多ノ手ニクハ、ハラント大津ノ方ヘヨチケルニ、九郎ヲヒカ、リテ大津ノ田中ニヨヒ追ハメテ、伊勢三郎ト云ケル郎等、打テケリトキコヘキ。頸モチテ参リタリケレバ、法皇ハ御車ニテ御門ヘイデ、御覽ジケリ。

(巻五——二六二ページ)

とある。義仲は苦境から源頼朝派遣の大軍と宇治川をはさんで対戦した。四部本の巻第九「義仲最期」・「義仲首渡」の顛末を描いたような顛末をもとに慈円は叙述している。すなわち末尾の施線部は、後白河院が義仲の頸を見たと叙述しているのは『治承物語』に「法皇、御車を六条東洞院に立て、御覽ぜらる。」(四部本の本文)に依拠しての文飾なのであった。それは義仲のクーデターで慈円の兄の九条兼実が摂政に就かなかつたことを、この『愚管抄』の安徳天皇の条の直前で、摂政に、

九条殿ハウルセク、ソノ時トリ出サレズシテ松殿ニナリケルヲバ、事ガラモ十二歳ノヲモテ方コソアサマシケレド、松殿ノ返リナリタルニテコソアレ、イミジクトテ、我レノガレタルヲバ仏神ノタスケト悦バレケリ。  
(巻五——二六二ページ)

二重施線で藤原基房が選ばれ、兼実は免れたのを「冥顯二法」の道理に則つて慈円が捉えたからに他ならない。

要するに『治承物語』に依拠して治承・寿永年間の治世、そして頼朝が壇ノ浦で平家一門を滅ぼすに至る経緯を道理史観から叙述しており、前掲した『愚管抄』の文章「カ、ル程ニヤガテ次ノ年正月ノ廿日……」より「……法皇ハ御車ニテ御門ヘイデ、御覽ジケリ。」までの文章の行間に『治承物語』を慈円は介在させた。後述するように『治承物語』を創出させた西山の空間で、

西山往生院より眺望には宇治伏見等鳥羽院等也

わか山は花の都のうしとらに鬼ゐるかとをふたくとそきく

(五一—四)

慈円が宇治川の方面を眺めている。これは宇治川先陣譚そのもの着想していく動機の一つになっている。<sup>[2]</sup>

(4)

### 第一節 『愚管抄』の道理から『将門記』の「世間の理」へ

景季が生済を源頼朝に懇望したものの、佐々木四郎高綱が拝領し、高綱が景季を追い抜いた後に続く「生ずきの沙汰」では、

宇治河の先陣を為けり。宇治の手落ちぬと聞こえければ、「高綱ぞ先を為つらん」と頼朝は思食されけり。

「佐々木四郎高綱、宇治河の先陣」とぞ、執帳に書かれける。

戦況の由来の帰結が伝ってきたので、そのことを「執帳」に頼朝が記したと四部本には描かれている。『吾妻鏡』寿永三年正月二十七日条に、

廿七日 丁巳 巳の剋、遠江守義定・蒲冠者範頼・源九郎義経・一條次郎忠頼等の飛脚、鎌倉に参著す。去ぬ

る廿日、合戦を遂げ、義仲ならびに伴黨を誅するの由これを申す。三人の使者、皆召によつて北面の石壺に参ず。巨細を聞しめすのところ、景時が飛脚また参著す。これ討亡・囚人等の交名の注文を持参するところなり。

方々の使者参上すといへども、記録すること能はず、景時が思慮なほ神妙の由、御感再三に及ぶと云々。

頼朝派遣の軍の指揮を執っている者から、義仲勢を誅殺したとの報告を承けた頼朝は、その飛脚の使者に直結させて、景時の飛脚も到来、飛脚の持つてきている名簿、景時の配慮を非常に神妙であると頼朝が感心したと記載されている。二重施線部の言辭は物語と全く同質である。頼朝の心情表現は『吾妻鏡』の素材に『玉葉』・『明月記』等とともに『平家物語』もあつたからに他ならない。<sup>[3]</sup> 覚一本や『源平盛衰記』等では梶原景季と佐々木四郎高綱都との二人が登場して先陣を競うのであるが、屋代本は八坂流の系統にあるわけだが、同系統の古本に属している百二十句本では、<sup>[4]</sup>

梶原平三景時参りて、「生暖賜はつて、今度源太冠者に宇治川渡させ候はばや」と申せば、鎌倉殿、「生暖は、自然の事あらんずるとき、頼朝物具して乗るべきなり。摺墨を」とてぞ賜はりける。

となつていて、父の景時が生済を懇望して景季の先陣に使わせようとした。景時自身を点描している。宇治川先陣譚が、景時を具象しているのは看過できない。

『新古今和歌集』(卷六・冬歌)には、

駒とめて袖うちはらふ陰もなし佐野のわたりの雪の夕暮

(六七二)

『源氏物語』の宇治十帖「東屋」巻で薫が浮舟を京から宇治へ移すことを決めに、

「佐野のわたりに家もあらなくに」など口ずさみて、里びたる簀子の端つ方にゐたまへり。

さしとむるむぐらやしげき東屋のあまりほどふる雨そそきかな

とうち払ひたまへる追風、いとかたはなるまで、東の里人おどろきぬべし。

この地の文をとり入れたのであつた。<sup>[5]</sup> 本説取りの修辭なのである。そこで宇治十帖「東屋」巻の施線部での沿岸と二重施線の東国の「里人」がどうなるだろうと心配しているに違いないとある言辭に着目してみたい。

四部本の「宇治川」で、

侍大將軍には梶原平三景時・嫡子の源太景季（中略）復佐々木四郎高綱と梶原源太景季、心中にて先を諍ひける間、馬の鼻を並べて打入れけり。之を見て畠山も追ひ入れぬ。二万五千余騎、我もくと渡しければ、水は堰かかれて上へ登りければ、雑人輒く下手を渡しけり。漏る水に何かなる物も手留らずして押し流さる。迎への岸へ着く処に、梶原源太景季が馬は、綱に頸を懸けて押し流されて、遙かの下より挙がりけり。佐々木四郎が馬も綱に頸を懸け、れども、太刀を抜きて綱を打ち切り、一番に樋と挙がる。

川。の沿岸での先陣争いの経緯の後に東国の梶原源太景季が鎌倉出発に際して頼朝に「生ずき」を所望したが、佐々木四郎高綱が拝領する章段「生ずきの沙汰」へ及ぶ。延慶本をはじめ覚一本等では「生ずきの沙汰」に直結させて先陣争いになっており、四部本での「宇治川」から「生ずきの沙汰」へ展開させたのと逆である。『平家物語』初期生成の『治承物語』そして六卷本『治承物語』では先陣争いそのものが眼目であると同時に東国の武士の生態と動向の本質を具現している。確かに未整理のような四部本の構成を後出本では整序させていたのであろう。

慈円圏と慈円周辺圏に参画した東国の下野国を出自としている宇都宮入道蓮生の次男の頼業は、梶原景時の女から生誕した。慈円を大叔父とする執政の「臣」である九条道家が、嘉禎三年（二二二七）頃から仁治元年（二二四〇）に亘って主導したのが慈円周辺圏である。その十五年前が承久の乱であった。『古今著聞集』三三二の「武勇」に、承久三年のみだれに、宇都宮越中の前司頼業、未だ無官なりけるが、宇治川を渡すとて押しながされて、水の底へ入りたりけるに、石にかき付きて、鎧をぬがんとしけるが、上帯示しめてとけざりければ、引きちぎりてぬぎて、およぎあがりたりけり。さしもはやき河の底にて、かく振る舞ひたりける。ゆゆしき事なりけり。水練なりけり。

との説話から、慈円周辺圏での宇治川先陣譚の六卷本『治承物語』の潤色に筆者は蓮生の意向を想定している。<sup>(6)</sup>

『将門記』承平八年（九三三）二月二十九日では千曲川をはさんでの争いを描いている。すなわち、

畜に百余騎の兵を率ゐて、火急に追ひ征かしむ。二月廿九日を以て、信濃国小県郡の国分寺の辺に追ひ着く。

便ち千阿川を帯して、彼此合戦する間、勝負有ることなし、厥の内に、彼方の上兵他田真樹、矢に中りて死ぬ。此方の上兵文室好立、矢に中るも生きたり。貞盛幸ひに天命有りて、呂布の鎧を免れて山中に遁れ隠れぬ。将門千般首を搔い空しく堵邑に還りぬ。

(一一〇)

将門が率いる軍勢が追い上げて、平貞盛側には天命が下り、鋭い鎧を免れて山の中に逃れ隠れ、いくたびも将門は頭を搔いて空しく本拠に帰って行つたとなつてゐる。四部本「横田河原合戦」(巻六)の、同じ川で義仲が、木曾、二千余騎にて、横田河原の迎への渡りの森に陣を取る。千曲河を隔て、源平左右に支へたり。城四郎長茂と戦つた場面に近い描出がなされている。

『将門記』から『治承物語』への影響を窺つていこう。

将門は坂東制圧へすすめていく、

又数千の兵を帯して、天慶二年十二月十一日以て、先づ下野国に渡る。各童の如き馬に騎る。皆雲の如きの従を率ゐる。鞭を揚げ蹄を催して、将に万里の山を越えむとす。各心勇み神驕りて、十万の軍に勝たむと欲ふ。

(一一五)

として、下野国衙の攻略に向かい、難なくこれを掌中におさめた。将門は皇位に就くが、貞盛そして秀郷の軍勢の襲撃によつて将門は討滅されてしまった。天慶三年(九三〇)四月二十五日に、

便ち下野国より解文を副へて、同年四月廿五日を以て、その頸を言上す。

(一一三)

下野国から将門の頸は解文を添えて六十一代朱雀天皇の在位する廟堂に進上されたのであつた。それまでの『将門記』の将門の形象を辿り直すと、

然る間、武蔵介源経基、常陸大掾平貞盛、下野押領使秀郷等、勲功の勇いなきに非ずとして、褒賞の驗有り。

(一一六)

下野国の押領使である秀郷等に武勇を認められて褒賞の御沙汰があつたと描いている。「新皇」として即位した将門は本拠地の下総国さらには「下野国」をはじめとして上総・上野・常陸・安房・相模の諸国を解放し、将門

の兄弟や同盟者を各国の長官に任命した。そのために、

偏に此の言を聞きて、諸国の長官は、魚の如く驚き、鳥の如く飛び、早く京洛に上る。然る後、武蔵、相模等の国に至るまで、新皇巡検し、公務を勤むべきの由を留守の国掌に仰す

将門は巡視して、公務に従うように役人に命じた。この部分をめぐって梶原正昭は「作者の将門への共感が文中ににじみでている処が少なくなく、東国の実情がいきいきよく描けている(中略)本書が一人の手になったものではなく、編纂や増補などの複雑な成立事情を反映したものである」との指摘をしている。<sup>7)</sup>とすると、やはり慈円圏での『治承物語』から六巻本へ再編させた慈円周辺圏での文事と類同することになる。

『将門記』が括られた一節が、

凡そ世間の理は、痛むで死すとも戦ふべからず。現在に生きて恥有らば、死後に誉れなし。

であった。『愚管抄』別帖の七十四代鳥羽天皇の条には、同時代史が「武者ノ世」であることを「道理」であることをはじめて叙述していく周知の一節は、

保元元年七月二日、鳥羽院ウセサセ給テ後、日本国ノ乱逆ト云コトハヲコリテ後ムサノ世ニナリニケルナリ。コノ次第ノコトハリヲ、コレハセンニ思テカキヲキ侍ナリ。城外ノ乱逆合戦ハヲホカリ。日本国ハ大友王子、安康天王ナンドノ世ノコトハ、日記モナニモ人サタセズ。大宝以後トイ、テソノ、チノコト、又コノ平ノ京ニナリテノ、チヲコソサタスルコトニテアルニ、天慶ニ朱雀院ノ将門ガ合戦モ、頼義ガ貞任ヲセムル十二年ノタ、カイナドイフモ、又隆家ノ帥ノトウイコクウチシタガフルモ、関東・鎮西ニコソキコユレ。

(巻四——二〇六く七ページ)

なのである。二重施線にあるように「武者ノ世」の言辞を象嵌しながら、つづく施線部には将門の乱の事象から、末尾の圏点では東国の空間へ及ぼせた。別言すれば、慈円は二重施線の「武者ノ世」を叙述し始めるにあたって、慈円圏で創出されていた『治承物語』に取用されている『将門記』の「理」と類同している。当該の「保元元年七月二日、鳥羽院ウセサセ給ヒテ後、日本国ノ乱逆(中略)天慶ニ朱雀院ノ将門ガ合戦モ、……」という施線部

の言辭は看過できない。そのことは、四部本の「橋合戦」(巻四)の末尾の一節で軍勢を指図した足利又太郎忠綱が、馬筏を作つて川を渡つて、

申しけるは、「昔、朱雀院の御宇、承平に謀叛を起こし、世を乱りし将門の將軍を討ち、武藏守に成りし倭藤太秀郷が末葉、足利太郎俊綱が嫡子、又太郎忠綱、生年十七歳、是くこそ先は懸くれ」と喚ばつて懸くる。残りの勢も之を見て、「我劣らじ」と渡しけり。

と描かれたからには、この場面も『治承物語』にすであつたであろう。さらには平家一門から離れて高野山にいる滝口入道のところで出家した維盛は、熊野参詣後、勝浦の浜の宮から那智の沖へ舟を漕ぎだして、今わの際にもなお妻子への愛執が断ち切れない。そこで維盛に滝口入道が教義を説いて、念仏を称えながら入水する場面に、

サレトモ出家ノ功德ハ莫太ナレハ、先世罪業皆滅シ給又ラン。百千歳百羅漢ヲ雖ニ供養スト、不レ及ニ出家ノ功德ニハトコソ申候ヘ。縦人有テ建ニ七宝塔婆ヲ一事、高サ雖レ至ニ三十三尺ニ、一日ノ出家ノ功德ニハ不レ可レ及。一子ノ出家スレハ、七世ノ父母皆成仏トコソ申候ヘ。

(屋代本・巻一〇「惟盛高野登山并熊野参詣同入水事」)

と描かれているのも、『言泉集』(通世・三帖之三畢)の「出家釋」のなかに、

又云若放ニ奴婢一人ニ令出家ニ功德猶無量如四天下中満ニ阿羅漢ニ百歳供養上起七寶塔ニ高至三十三天ニ不レ加一日出家功德又云以一日一夜出家功德二十劫不墮三惡道ニ又云離六千六百六十歳三途苦ニ又云一子出家七世父母皆得脱ニ云々』

(中略)

書本云承元四年四月卅日於飲室谷菴室以圓詮房本書寫了

聖覚三十四歳

一交了』

とあつて、施線の年月日は、西山に『治承物語』創出の慈円園が組織された承元四年(一一二〇)より建保六年

(二二八)頃と全く一致する。そのうえ『言泉集』(忌日帖・三帖之二)の「金光明経功用事有之」に、  
 将門合戦章云干時寄<sup>セ</sup>中有之使二所告一消息云、将門作悪<sup>ツクル</sup>之時催<sup>テ</sup>伴類<sup>ヲ</sup>一以成ス犯<sup>ヲ</sup>一受報之日蒙<sup>テ</sup>諸罪<sup>ヲ</sup>  
 以独苦也

との刮目すべき言辞があり、圏点を付したように「将門合戦章」として呼ばれていた『将門記』の内容に及ばせていたからなのである。慈円圏での『将門記』受容をめぐっては、本稿の「まとめ」の第五節で言及することにした。

## 第二節 四部合戦状本の周辺

慈円圏で創出した『治承物語』の内実は「頼朝の物語」であった。それを遺存している四部本の「源氏揃」(巻四)の章段には「伊豆国には、兵衛佐頼朝」との言辞を嵌入して、「頼朝謀叛由来」(巻五)の章段へ及ばせて「伊豆国北条郡に流されて、徒らに三十三年の齢を積みて、頗<sup>すこぶ</sup>る二十有余の星霜を送る。(中略)年来の宿意は而<sup>さ</sup>る事にて、高雄の文学が勧めとぞ聞えし。」とし、さらに三章段を隔てたところに布置している「文学・頼朝対面」(巻五)の章段に、

兵衛佐、一定其れとは思はねども、父の首と聞きければ、馴<sup>なづか</sup>しくて、先づ涙を流したまふ。其の後に「実に志有り」とて、打ち解けられけり。

父の義朝の首を見せられた頼朝は、程なく平家軍と対峙していく顛末へ展開させていく。

『愚管抄』別帖の八十一代安徳天皇の条で、はじめて頼朝を前面に押し出す。保元の乱より以降の時空をもとに頼朝の境涯を辿りながら、慈円は、

伊豆二八流刑二行ヒテケルナリ。物ノ始終ハ有<sup>レ</sup>興不思議ナリ。其時モカ<sup>ヽ</sup>ル又打カヘシテ世ノヌシトナルベキ者ナリケレバニヤ。頼盛ヲモフカクタノミタル氣色ニテ有ケルナリケリ。コノ頼朝、コノ宮ノ宣旨ト云

物ヲモテ来リケルヲ見テ、「サレバヨ、コノ世ノ事ハサ思シモノヲ」トテ心ヲコリニケリ。又光能卿院ノ御氣色ヲミテ、文覚トテアマリニ高雄ノ事ス、メスゴシテ伊豆ニ流サレタル上人アリキ。ソレシテ云ヤリタル旨モ有ケルトカヤ。但コレハヒガ事ナリ。文覚・上覚・千覚トテグシテアルヒジリ流サレタリケル中、四年同ジ伊豆国ニテ朝夕ニ頼朝ニ馴タリケル、ソノ文覚、サカシキ事ドモヲ、仰モナケレドモ、上下ノ御ノ内ヲサグリツ、イ、イタリケルナリ。

(巻五——二五—五二ページ)

と叙述した。施線では『治承物語』に描いた頼朝の旗揚げへの文覚の教唆は「虚構」であると摘記した。自己が企画・創出させた物語の本質を露呈させながら、二重施線では後白河院や平家側のそれぞれの心を探って旗揚げを文覚自身が勧めたのが実相であったと批評した。当該の文章は、慈円が『治承物語』を採用しながら同時代史を展開させている明確な徴証になっている。このことを具体的に窺つていこう。

「頼朝の物語」を内実としている『治承物語』の真骨頂は「武」の側面であるので、四部本の章段「頼朝安房国落」(巻五)の「兵衛佐、石橋の軍に負けたまひて、山に込もりたまひたりけるを、……」との一節から、次の章段「東国武士頼朝の許へ参る事」(巻五)の末尾では、

その後、東八個国の軍士等の随ひ着くことは、疾き風の草木を靡かすより甚し。足柄山を超えて、木瀬河に宿して、勢を調ふるに、二十万余騎なり。此の外、甲斐国の源氏、武田太郎信義、二万余騎を率して富士川の東の岸に在り。

と括り、本章段から四章段を隔てて「富士川」(巻五)では、平維盛が率いる軍勢が水鳥の羽音を源氏の襲撃と信じて逃亡したと描かれた。その物語の展開をもとに、慈円は、前掲した別帖の安徳天皇の条の波線部の「サレバヨ、コノ世ノ事ハサ思シモノヲ」トテ心ヲコリニケリ。」に続けて頼朝が旗揚げから、富士川での平頼盛が率いる軍勢との対峙そして清盛の病没を、

駿河ノ浮嶋方原ニテ合戦ニダニ及バデ、東国ノ武士具シタリケルモ、皆落テ敵ノ方ヘユキニケレバ、カヘリノボリケルハ逃マドヒタル姿ニテ京ヘ入ニケリ。其後平相国入道八同五年閏二月五日、温病大事ニテ程ナク

薨逝シヌ。其後二法皇二国ノ政ノカヘリテ、内大臣宗盛ゾ家ヲツギテ沙汰シケル。(巻五——二五三ページ)

道理史観から後白河院の院政に戻ったと施線で批評するのであった。当該の文章の行間にも四部本「清盛死去源氏揃」(巻六)から「宗盛内大臣」(巻七)さらには「一門都落」(巻七)で描かれているような『治承物語』の物語そのものを介在させた。

治承四年(一一八〇)八月十七日、頼朝は伊豆国で旗揚げして山本判官兼隆の館を襲撃して首尾よく討つたものの、同月二十三日に石橋山に陣を取った頼朝は大庭景親等の平家与党の軍勢に敗れた。同月二十八日には真鶴岬から海路を通過して安房へ逃れて、相模国鎌倉に入ったのは同年十月七日であった。同月二日条の『吾妻鏡』に「大井・隅田の兩河を濟る。」とみえ、現在の江戸川、武蔵国と左下総国との境に隅田川を渡った。その二日後の四日条には「畠山次郎重忠、長井の渡りに参会す。」とあり、その後の頼朝を四部本からみていくと武蔵国の「長井の渡り」に行く。

「橋台戦」(巻四)に「大手は長井の渡りを為、搦手は杉の渡り」と描かれた東国の利根川の辺りで頼朝は、宇治川先陣譚で義経に川の瀬踏み進言する畠山重忠と逢っている事実があった。

慈円圈に参画していく宇都宮入道蓮生は承安二年(一一七三)に京で生誕して、「下野国」の宇都宮家に戻ったのは治承四年(一一八〇)であった。したがって江戸川の上流域が「下野国」に通じているからには、旗揚げした頼朝を蓮生は胸に焼きつけたに相違ない。帰国は九歳の蓮生ではあつたが故に、身近に幼心に印象深く記憶に残し、後年の『治承物語』や六巻本への再編での宇治川先陣譚をはじめとする川や海をめぐる空間を背景にしている章段にも投影されることになるであろう。

四部本の巻第九の巻頭は、章段「元暦元年年頭記事」である。本章段に直結しているのが「宇治川」・「生ずきの沙汰」の二章段、すなわち宇治川先陣譚なのである。元暦元年(一一八四)正月、京でも屋島でも新年に儀礼は満足には行われず、「三種神器を何としても廟堂へ戻せ」との後白河院の命を承けて、義仲は屋島へ出発しようとするが、折しも東国から源頼朝が弟範頼・義経を大將軍とする、

侍大將軍には梶原平三景時・嫡子の源大景季・畠山次郎重忠・佐々木四郎高綱（中略）已下三万五千余騎、今日宇治に付く。押し寄せて見れば、……

軍勢と対戦し、やがて義仲は敗死する。義仲の首も都大路に渡され、獄門にかけられた。「義仲最期」・「義仲首渡」の章段である。『治承物語』に依拠して、本稿の「はじめに」で前掲したように『愚管抄』別帖の安徳天皇の条は、

カ、ル程ニヤガテ次ノ年正月ノ廿日、頼朝コノ事キ、テ、（中略）土肥実平・梶原景時・次官親能ナド云者サシノボセタルガ、（中略）義仲ハ郎等ドモヲ、勢多・宇治・淀ナンドノ方ヘチラシテフセガセント、手ピロニクハダテ、有ケルホドニ、ス、ドニ宇治ノ方ヨリ、九郎、チカヨシハセ入テ川原ニ打立タリトキ、テ、義仲ハワヅカニ四五騎ニテカケ出タリケル。ヤガテ落テ勢多ノ手ニクハ、ハラント大津ノ方ヘヲチケルニ、九郎ヲヒカ、リテ大津ノ田中ニヲヒ追ハメテ、伊勢三郎ト云ケル郎等、打テケリトキコヘキ。……

（巻五——二六二ページ）

という部分には、「宇治川」・「生ずきの沙汰」の二章段から「義仲首渡」の章段までの物語が介在するわけである。それは慈円が『新古今和歌集』代表的歌人であったから、当該の文章の行間には本説取りの修辭が凝らされていると換言できよう。そのことは『愚管抄』付録で

ソノ中代タノウツリユク道理ヲバ、コ、ニウカババカリハ申ツ。ソレ又ヲシフサネテソノ心ノ詮ヲ申アラハサントヲモフニハ、……

（巻七——三三二ページ）

圈点の「詮」とは、歌論用語であつて、眼目という意味なのである。多くのことうちの要点だけを叙述している慈円は表明している。定家の歌論『毎月抄』（五）にも「詞をこそ詮とすべけれ」とみえる。

四部本の東国側の空間に関連する諸章段をも顧慮して、四部本の巻第九の全三十章段を鳥瞰して「宇治川先陣譚」には如何なる意義がはらんでいるかを改めてみていきたい。

巻第九の最初の章段「元暦元年年頭記事」では、

元暦元年（甲辰）正月一日、院の御所は六条洞院、大膳大夫業忠が宿所なりければ、

御所の躰、礼儀行はるべき所にも非ねば、拝礼も無し。

として、寿永三年正月一日から次の章段の「宇治川」では、同月の

同十日、木曾左馬頭義仲、院の御所へ参りて、……

屋島へ出向く旨を後白河院に言上し、同章段には、

同廿六日、東国の軍兵、宇治・勢多より乱れ入る。(中略) 侍大將軍には梶原平三景時・嫡子の源太景季・畠山次郎重忠・佐々木四郎高綱……

正月二十六日の宇治川合戦までを概括して、梶原景時と子の景季にも及ばせ、その後、川をはさんでの先陣の結末の場面を、

梶原源太が馬は、繩に頸を懸けて押し流されて、遙かの下より挙がりけり。佐々木四郎が馬も繩に頸を懸け、れども、太刀を抜きて繩を打切り、一番に樋と挙がる。

と描いて本章段を括った。そして「生ずきの沙汰」の章段へ推移させる。佐々木四郎高綱がその生済を頼朝の許から盗んできたと偽ったので、景季は、

源太、腹が居て、「妬たい、景季も盗まずして」とぞ云ひける。佐々木、面白く陳じてこそ遁れけれ。終に此の馬に乗りて、宇治河の先陣を為けり。宇治の手落ちぬと聞こえければ、「高綱ぞ先を為つらん」と頼朝は思食されけり。

と描き、宇治川先陣譚を括った。他の諸本は施線部の頼朝の言行を描かない。このことから四部本は『治承物語』が「頼朝の物語」を遺存しているといえよう。

『玉葉』寿永三年(一一八四)正月十九日条は、

十九日己酉。昨天下頗る又物騒、武士等多く西方に向ふ。行家を討たんためと云々。或は又宇治にあり、田原地の手を防がんためと云々。

と記載した。翌日の条でも、

二十日庚戌。天晴。物忌なり。卯の刻人告げて云はく、東軍已に勢田に付き、未だ西地に渡らずと云々。相次ぎ人云はく、田原の手已に宇治に着くと云々。(中略) 敵軍已に襲ひ来たる。仍つて義仲院を棄て奉り、周章対戦の間、相従ふ所の軍僅に三十四騎、敵対するに及ばざるに依り、一矢をも射ず落ち了んぬ。とし、鬭争があつて義仲は戦死したと刻んだ。しかも慈円が翌二月三日条に、

三日壬戌。法印<sup>(慈円)</sup>来らる。

と記載しているからには、宇治川先陣譚の背景を『玉葉』の記主である兄の兼実と慈円はつぶさに語り合つたであろう。そのうえ、寿永二年(一一八三)十月十八日に無動寺で慈円は百日入堂を完遂していた(同日条)。元暦元年(一一八四)一月二十日には天皇の心身の安穩を修する護持僧に補せられる直前にいた。寿永二年(一一八三)十二月九日条にも、

平氏と和平の儀義仲に仰せらるべきなりと云々。然れども、件の事義仲太請けざる由外相に表すと云々。仍つて仰せ下さるるに及ばずなりと云々。

と兼実は記載しているからには、宇治川先陣譚の背景を含む時空を廟堂や山門の内外の噂等を介してでも慈円は弁えていたことになる。

義仲の父は源為義の次男義賢で、治承四年(一一八〇)九月七日に源義朝の嫡子義平が討たれた。頼朝が旗揚げの三ヶ月後であり、義仲は二十七歳であつた。その二年後の寿永元年(一一八三)六月二十五日を四部本の「横田河原合戦」(巻六)の冒頭で、

六月廿五日に、越後国より早馬を以て申しけるは、「去んじ二月、当国の住人城太郎資長、木曾冠者逼めんとして、六万余騎を率して越後国へ……

として、

北陸道の兵、皆義仲に随ふ。長重は山野に交はり、安堵せず」と告げたりければ、平家、亦騒ぎけり。

で本章段は括られた。延慶本「城四郎与木曾合戦事」では、

猿程に城四郎長茂、当国廿四郡、出羽マデ催テ、敵二勢ノ重ヲ聞セムト雑人マジリニ馳集テ、六万余騎トゾ注タル。……  
(三本・二六「城四郎与木曾合戦事」)

となつており、合戦の全貌を詳細に描いて、末尾は、

木曾悦テ、信乃馬一疋ツ、ゾタビタリケル。サテコソ五万余騎ニ八成ニケレ。(中略)吾身八信乃へ帰テ、横田城ニゾ居住シニケル。(中略)九日、官庁ニテ大仁王会被レ行。承平将門ガ乱逆ノ時、法性寺座主奉テ被レ行之例トゾ聞シ。  
(三本・二六「城四郎与木曾合戦事」)

で本章段は括られた。他の合戦の場合と同様に推移を順序だてた構成なのである。このことが四部本と相違する。四部本では合戦を坦坦と報告書のような筆致で掲げており、延慶本「沼賀入道与河野合戦」の章段の一節では、

東国源氏謀反事、重テ申送之間、被レ下ニ宣旨。其詞云、  
 伊豆国流人源頼朝、  
(中略)

治承五年正月十六 日

左少弁

とした。四部本の冒頭文「六月二十五日……」の早馬が都に着く設定は、四部本が「記録類と良く符合している」との指摘がある。<sup>[8]</sup> 富倉徳次郎も、

「横田河原合戦」についての記述は、「四部合戦状本」にみえるものは、もつとも簡明で、史実的に正しい。と論じていた。<sup>[9]</sup>

四部本の「横田河原合戦」(巻六)では、

信濃国近くの千曲河の岸に、横田河原に陣を取る。木曾、二千余騎にて、

と描きながら、

上下皆渚に下り居つゝ、各々馬の足を寒<sup>ひ</sup>やして安堵したる所に、(中略)木曾は搦手にて、既に寄りて時を作

れば、力付きて、千曲河を打渡して、喚きて懸け入る。

であるからには、宇治川先陣譚の話柄ときわめて近似している。とすれば、既に象つた「横田河原合戦」の趣向を踏襲ながら展開させたこともあり得ると推察されよう。

そもそも『治承物語』は慈円が「あそび心」から企画・創出させていたからなのであった。<sup>10</sup> 四部本で、景季が生済を所望したが拒否され、駿河国で高綱が生済を引いているのを見て景季が激昂したが、高綱が盗んだと嘘をつく。そのことを含む「生けずきの沙汰」の章段の結末は、一部分は前掲したように、

「その儀に候ふ。申しつれども賜らず。時に『繩は世も付かじ』と思ひて盗みけり」と申しければ、源太、腹が居て、「妬たい、景季も盗まずして」とぞ云ひける。佐々木、面白く陳じてこそ遁れけれ。終に此の馬に乗りて、宇治河の先陣を為けり。宇治の手落ちぬと聞こえければ、「高綱ぞ先を為つらん」と頼朝は思食されけり。「佐々木四郎高綱、宇治河の先陣」とぞ、執帳に書かれける。

橋桁渡るは誰々ぞ。渋谷馬允重助・樽屋藤太有季・平山武者所季重等なり。自ら討たんと立ち合ふ者、而らぬ者も落ち失せぬ。勢田をば稲毛三郎重成・榛谷四郎重朝、貢御の瀬を渡して乱れ入る。

であつたからには、慈円圏の「あそび心」から創出された宇治川先陣譚の實質的な中心人物は梶原景季なのである。さらに留意したいのは施線部であつて、延慶本は、

サテ宇治、勢田渡タル日記、鎌倉へ進セタリケレバ、宇治河ノ先陣ハ近江国住人佐々木高綱トゾ被レ付タリケル。  
(五本・七「兵衛佐ノ軍兵等付宇治勢田事」)

「鎌倉」であるから、頼朝が統率する鎌倉幕府へ報告された。固有名詞として「源頼朝」と個人名ではないことに『治承物語』との本質的な相違が露呈する。延慶本では、しかも四部本では景季が生済を所望した場面で、

鎌倉殿御心中ニ、「ニクヒケシタル者ノ声ヤウ、ケシキ哉」トゾ思食レケル。  
(五本・六「梶原与佐々木馬所望事」)

傲慢で憎い態度であると景季を頼朝は思つたと描く。頼朝の「負」の側面が浮上している。現存の十四世紀初頭に書写された旧延慶本（六巻本『治承物語』の祖本の延長線上にある本）とは相違し、現存の延慶本は、語り本の覚一本

を取り込んでいる十四世紀末の応永年間の混態本であったからなのかもしれない。

四部本は頼朝その人が具象化している内実が「頼朝の物語」を遺存している証憑になってくる。さらに看過できないのは、諸本ともに波線部の景季の屈託ない言動があるものの「生けずきの沙汰」の章段の二重施線の「面白く陳じてこそ遁れけれ」の寸言は『平家物語』現存諸本では四部本だけなのであって、この寸言は『治承物語』を創出させた慈円圈の「あそび心」をきわめて象徴的に具現した言辞であった。<sup>[11]</sup>

編年体の体裁を貫いている四部本は、挿入説話の類が極端にすくない最古態のテキストであった。<sup>[12]</sup>

宇治川先陣譚につづく義仲の敗走から、乳母子の今井兼平と二人になったあとの悲劇的な場面へ推移させ、義仲の討死、そして末尾の文では、

今井自害しなければ、粟津の軍は留まりぬ。

として、他の諸本と同様に四部本の「木曾最期」の章段は括られた。本章段から十二章段を隔てた章段には、「二度の懸」の章段があつて、梶原景時・景季父子が苦戦している模様が描かれていく。その最初に、

東の大手生田の森より、梶原平三景時、先陣と覚えて進みけり。平次景高、生田の森の方を見互して、

嵐吹く駒が林を今朝見ればまた古葉にて替はら去りけり

との諸本にはみえない歌が載っており、定家の家集『拾遺愚草』（雑廿首）に、

相坂関

きみに猶逢坂山もかひぞなき杉の古葉に色し見えねば

(二二九)

とあって、定家が「逢坂山で人に逢うように、君が代に逢い申し上げはしたものの、我が子である為家の衣の色は杉の古葉は色だけで、他の色が見えないから、甲斐がありません」と詠んだ歌を、本歌取りにしたと推定されている。<sup>[13]</sup> さらに「二度の懸」の章段の末尾には、

爾さも此の源太と申す者は、同じき東武士とは云いひ乍なら、内に情け有りて、外に色有る男子なり。合戦の庭を好みけり。而さも、斯さると事は二月上旬の比なり。初桜を一枝手折ツりて、箆へびらに差して戦ひければ、懸くる

時も颯と散り、復引く時も颯と散る。甲の鉢、鎧の左右の袖の上に散り登りければ、情け有るも情無きも、皆人目を付けてぞ見る。中にも、平次景高之を見て

(原文一行空白)

又景高是く、

(原文一行空白)

又景季是く、

(原文一行空白)

となつてゐる。空白の三行のそれぞれには「箆の桜」に関わる歌が入つていた。<sup>(14)</sup> 風雅な輪郭で括られた。語り本系統には全く存在せず、延慶本では、

梶原源太景季、係ル時ハ八タヲサ、ゲホロヲカケ、引時ハイツノホドニマクラム、ハタヲマキホロヌイデ、度々入替く戦ケリ。武芸ノ道ニモユ、シキ者ナル中ニ、ヤサシキ事ハ、片岡ノ桜イマダ青葉ナルヲ一枝折テ、エブラニ差異テ、敵ノ中ニテシバシ戦テ引ケレバ、桜ガ風ニフカレテサトチリニケリ。

(五本・二〇「源氏三草山并兵一谷追落事」)

であるから、施線部はさながら歌を捨象して景季の風流を「箆の桜」に託して四部本の当該場面を仕立てなおしたような趣ではある。既述したように屋代本と同じ系統の百二十句本にも、

梶原が次郎、平次景高、あまりに進んで駆けければ、大將軍、使者をたて給ひて、「後陣のつづかぬに先駆けしたらん者は、勲功あるまじきぞ」とのたまへば、平次にかへて、「御返事に、

もののふのとり伝へたる梓弓ひいては人のかへるものかは

と申させ給へ」と言ひすてて、おめいて駆け入る。

景季の弟の景高は「父祖より相伝した梓弓はひとつ引けば戻しません。私は武士の身、ひきかえせるものでしょうか」と詠じたと描かれている。

このような文雅な構成に仕組んだ理由をめぐって山本幸司は「頼朝の分身として担ってきた景時」として捉え、元暦元年(一一八三)八月十一日から建久六年(一一九五)八月十六日に及ぶ事蹟をもとに分析して、

そもそも和歌は本来、単に興趣を慰めるだけものではなく、祝言・占い・託宣など神と結び付きの深い言語活動で、その才もまた天与のものとして古来、高く評価されてきたものである。坂東武者の中で和歌に関わる挿話が伝えられているのは、宇都宮氏など特定の家に限られるが、特に頼朝周辺では梶原一族以外あまりない。しかも、頼朝と関わる歌の詠まれる場合は、合戦の行路、狩場、上洛の途侍などである。(中略)景時の一族がそういう祝言者としての役割を担ったのは、単なる偶然ではなく、それもまた景時一族の頼朝政権における重要な役割の一つだったのだと私は考える。

と結論づけた。<sup>15)</sup> 佐藤和夫も、

景時が「文筆にたずさわらずといえど、言語に巧みの士」であったことが、幕府草創期の坂東武者の中では異彩を放っていたのではなからうか。平氏家人として京都に馴れ親しんでいた教養と洗練された感覚は、貴族的武将であった頼朝の期待に応えられるものだったことは容易に想像されるのである。(中略)景時は、一の谷の合戦で出陣に梅の花一枝を籠かごに挿して臨んだ風流、奥州白河の関でも、能因法師の古歌にちなんだ和歌を詠んで面目をほどこしたことなど、坂東武者の野暮ったさの中ではスマートな才子であり、その筆跡もなるほどとうなずかされる。

景時・景季父子の実像の特徴をめぐって批評していた。<sup>16)</sup>

宇治川先陣譚には、治承・寿永の争乱を弁えていた人が関与しているであろう。先行研究から宇治川先陣譚を創出させていくうえで、当人の慈円そして慈円圏に参画していた人材として蓮生が最もふさわしい人となつてこよう。そのことは、引用した山本幸司の言説の施線部で「坂東武者の中で和歌に関わる挿話が伝えられているのは、宇都宮氏など特定の家に限られる」とし、佐藤和夫が施線部の圏点で梶原景季を「風流」・「スマートな才子」と評しているからである。既述したように宇治川先陣譚の主人公の景時は梶原景時の嫡男であり、景季の弟は蓮

生の娘と間に生誕した宇都宮頼業であった。しかも第一節にすでに掲出した『古今著聞集』(三四三)に「承久三年のみだれに、宇都宮越中の前司頼業、未だ無官なりけるが、宇治川を渡すとして押しながされて……」とある説話が載っているためでもあった。<sup>[17]</sup>承久の乱から十七年年後に再編された六卷本『治承物語』に描かれた宇治川先陣譚に蓮生が手腕を発揮していく。覚一本系の本文が混じる以前の六卷本『治承物語』を祖本とする延慶本には、景季の、現存の延慶本に、

梶原此ヲミテ、「キタナシ。ワギミニハダシヌカルマジキモヲ」トテ、ザト河ヘソ打入レケル。此ヲ初トシテ、二万五千余騎、我モくト打入タリ。馬筏ヲツクリテ渡シケレバ、河ノ水ナガレモヤラズ、ウハテハ更ニ大海トゾ変ジケル。

とあるような場面がすでにあり、蓮生がを潤色したと推定されよう。

### 第三節 『愚管抄』の「東国武士ハ夫マデモ」について

宇治川での戦闘そのものを『愚管抄』に叙述されている藤原範季の言行からみていこう。

四部本の章段「宇治川」では、木曾義仲勢と対峙していく場面を「東国の軍兵、宇治・勢多より乱れ入る。」との一文から始発させて、「宇治の大將軍は九郎冠者義経、副將軍には安田三郎義定・大内冠者惟義、侍大將軍には梶原平三景時・嫡子の源太景季」をはじめとして「三万五千余騎、今日宇治に付く。」とし、

宇治・勢多の橋を引き、迎への岸には乱杭(らんこう)を打ち、繩蚊(なづな)へ、逆木樹(さかぎ)繋ぎ、流し懸け(なづな)れば、渡るべき様も無し。橋板をひきはすし、対岸の方には施線にあるようには不規則に打ち込んだ杭をやたらに打って、「繩蚊」(屋代本と同じ系統の百二十句本では「大綱張り」とある)すなわち「木の枝の先端をすべて鋭く尖らした柵があるので渡れないと描いている。このようなバリケードをめぐる、川合康は宇治川先陣譚等の「騎馬武者同士の一騎打ちのイメージが一般的に語られてきましたが、当時の古記録や古文書、『平家物語』諸本などを詳しく検討してみると」と

して、

軍勢が通行可能な主要街道（大道）や堀や逆茂木によつて遮断する「城郭」が各地に構築され、それを利用して歩兵と騎馬武者が連携して迎撃する組織戦が展開（中略）多くの民衆が「城郭」構築や除去のために戦場に動員されていた（中略）鎌倉幕府権力が、治承・寿永内乱期の戦争を遂行していく過程で、各国の惣追補使（守護）<sup>18)</sup>を設置し、国衙機構を通じて国内の武士・民衆を動員……

と論じている。この圏点の「民衆」の戦場への参加は『愚管抄』別帖の八十二代後鳥羽天皇の条で、後白河院の近臣の藤原範季が

東国武士八夫マデモ弓箭ニタツサヒテ候へバ、コノ平家カナヒ候ハジ。

（巻五——二五七ページ）

圏点を付したように「夫」までも参加していると所懐を述べた。さらに、そのような軍勢にはとても施線で平家側には勝目がないと判断している。治承三年（一一七九）の清盛のクーデターによつて解官した経歴の持ち主であったから、憎悪からの思いが介在してもいようが明晰な予測なのである。それは右文の後に、

コノ範季ハ後鳥羽院ヲ養ヒマイラセテ、踐祚ノ時モヒトヘニ沙汰シマイラセシ人也。サテ加階ハ二位マデシタリシカドモ、當今ノ母后ノチ、ナリ。サテ贈位モタマハレリ。範季ガメイ刑部卿ノ三位ト云シハ能円法師ガ妻也。

（巻五——二五七、五八ページ）

とある。範季は後鳥羽院を幼い頃に養育し、建仁三年（一一〇三）正月に従二位となり、しかも範季の娘の範子（重子と改名し、修明門院の院号を賜る。）は後鳥羽院の第三皇子（八十四代順徳天皇）を生んだと叙述された。しかも範季の人生を探ると、若年の頃に東国の常陸介・上野介を歴任し、安元二年（一一七六）には陸奥守を兼任していた。廟堂の模様と豊富な東国での見聞を帰納させた適確な判断であった。『愚管抄』の「夫」とは、作業等の労役にたずさわる人夫すなわち労働者であり、川合の言説にある「民衆」は同一と言えよう。しかも範季は九条兼実の家司であった。慈円は兄を介して様々な範季の東国関係の事象を弁えていようし、慈円圏に参画させた東国の下野国の宇都宮家を出自としている蓮生の直接の情報に則つても「東国武士八夫マデモ」としたはずである。この言辭

は宇治川先陣譚創出の基底に据えられていく。そのことを窺ってみよう。

当時の合戦の定石をめぐって、福田豊彦は、

当時の戦闘は、矢いくさから始まり、打ちものの戦い、そしてよき敵を求めて組み討ちとなる。矢も太刀うちもすべてが馬上の戦いであり、騎馬の個人戦が合戦の原型であった。歩立ちの下人たちは、戦場では殆んど非戦闘員……

としている。<sup>(19)</sup> 圈点を付した「下人」について、さらに福田は、

村司・郷士たちは日常的に農民を支配し、年貢の徴収や治安の維持などに当たっていたであろう。こうような日常的支配機構は、中世においては、殆んどそのまま軍事編成に移行したと考えられる。つまりこの村司・郷士たちは、いざ合戦の際には常胤の郎等となり、子息・兄弟などの騎馬武者と幾人かの歩兵を従えて馳せ参ずるわけである。

と具体的に説明している。<sup>(20)</sup> この施線部そのものが「宇治川」の章段で、

侍大將軍には梶原平三景時・嫡子の源太景季・畠山次郎重忠・佐々木四郎高綱……(中略)……三万五千余騎、今日宇治に付く。

と描いている。二重施線部の「三万五千余騎」の騎馬それぞれには「夫」が従属していた。四部本に、

水は堰かれて上へ登りければ、雑人共輒く下手を渡しけり。洩る水に何かなる物も手留らずして押し流さる。迎への岸へ着く処に、梶原源太が馬は、綱に頸を懸けて押し流されて、遙かの下より拳がりけり。

人馬の間から漏れ出た水に圈点を付したように「雑人」が流されていく場面が結構されている以上、軍勢には「夫」が関わっていた実相が明瞭となる。

宇治川先陣譚に点描されているところの圈点を付した「雑人」には、橋桁作業等の労役の任にあたる者もいたはずである。慈円圏で創出された『治承物語』では、その実相を見事に捉えていたのであった。

## 第四節 西山義と勸進そして宇治川の歌

藤原俊成の撰進した『千載和歌集』(巻一九・釈教歌)に、

法華経の葉草喩品の心をよみ侍りける

僧都源信

大空の雨はわきてもそゝかねどうるふ草木はおのが品々

(一一〇五)

名利を嫌って横川に隠棲した源信(九四二〜一〇一七)は、仏法の恵みには差別がないものの受ける側に違いが生じると詠じている。弟子の源算は承保元年(一〇四七)に別所の西山に庵を結んだ。山城国葛野郡の桂川を渡つて西へ進めば大原野社へ辿り着く。その麓からつづら折りの阿智坂を登れば、善峯寺にたどり着く。その北側の尾根にある庵を源算は往生院と号したのであった。往生院の第三代院主の慈円が、西山の空間で『治承物語』を企画・創出させた。眼下の京の西部を南流する桂川は、淀付近で宇治川へ合流していく。

西山に隠棲していた承元二年(一一〇八)、慈円は、

西山往生院より眺望には、宇治、伏見等、鳥羽院等也。

わが山は花の都の良に鬼ゐる門をふたぐとぞ聞く

(四八〇〇)

天台座主を辞しながらも、やはり上の句で「わが山」である延暦寺のある比叡山を望んだ歌を詠じた。さらには、

今はとて槇まきの島戻さん住むもかひなき宇治の橋守

(四九八六)

宇治川の橋の番人に及ばせて、平等院の人事等に関する嘆訴をめぐる歌を詠じた。四八〇〇番歌は仏法、四九八六番歌は王法に関するものであるから、『愚管抄』の仏法王法相依の道理に通じてこよう。一方では、

宇治川の石間をわけて泡沫の舞ひ乱らむ影ぞ恋しき

(五一八四)

川の急流が泡立つ模様を捉えてもいるので、宇治川先陣譚そのものが慈円の企画であったことを如実にする証憑にもなってくるであろう。

文治二年（一一八六）八月十五日、三十二歳の時に平等院室院に補せられ、建久元年（一一九〇）十月十九日には平等院本堂で定家と歌の贈答を交わしている。すなわち、

衣擣つ音は都のものにもあれ嵐は疎き闇の手枕

（五一九六）

今ぞ聞く静まる夜半に言訪ひて更くれば近き宇治の川浪

（五一九七）

五一九六番歌では、衣をうつ音は都でも寝所の手枕で聞きましたが、山風の音になじまなかったが今は寂寥感をさそうと定家が詠じた。そこで闇の中で聞こえる風の音を、夜が更けて聞くと宇治の川波の音がはつきりと聞こえると五一九七番歌で和している。宇治川先陣譚の背景となる宇治川の空間を定家も知悉していたと同時に、「四十八首歌合」で定家は、

水郷夏望。

夏ながらこゆると見えて月影の涼しく下る宇治の川舟

（四一七九）

月光が涼しくさす中を下る宇治川の舟を詠じた。当該歌の詞書の「水郷夏望」から定家は西山の慈円圏の高台より宇治川を眺望していた。詠歌も『治承物語』の宇治川先陣譚を創出する定家の言行と呼応している。

慈円のあとを引き継いだ西山の第四代往生院院主の證空は、西山義の開祖である。證空は、〔21〕 絵画・彫刻・建築・工芸等の「造型」することが衆生を救うはたらきをするとの信仰を説いていた。そのため證空は、往生院の背後の山容が「仏器」の三鈷（修行に用いる仏具、金剛杵すなわち三鈷杵）に似ていたので、往生院を「三鈷寺」と改名して今日に至っている。

往生院から三鈷寺への改名は、證空の教義の西山義を端的に投影させたわけであった。

院政期になって既成の寺院を去り、別所に修行の場を求める風潮が次第に盛んになって聖が増加してくる。古代律令国家の後ろ盾を失った神社は機構を整えていくうえで、庶民に寄付を求める役割を担う聖が活躍し始める。勸進聖の出現であった。『愚管抄』別帖の八十一代安徳天皇の条には、

……十二月廿八日二遂二南都へヨセテ焼ハラヒテキ。ソノ大將軍八三位中将重衡也。アサマシトモ事モヲロ

力也。

(巻五——二五二ページ)

とある。治承四年(一一八〇)十二月二十八日、平重衡が南都の東大寺等を焼亡させてしまった。そこで武士出身の重源(一一二二〜一二〇六)は再建のための大勲進職に補任されて以降、聖を従えて諸方に結縁を勧める等の事業に専念していく。屋代本の頼朝の旗揚げをめぐる一節で、

抑兵衛佐頼朝ハ、去永曆元年三月廿日、十三ニテ伊豆北条蛭島ニ流レテ、廿余年ノ春秋ヲ送向フ。年来日比モアレハコソ有ニ、今年シモイカニシテ謀叛起シ給ソト云ニ、期日ニ聞シハ、高雄ノ文学聖人ノメタリケルトカヤ。此ノ文学ト申ハ、渡部遠藤左近将監持遠力子ニ、遠藤武者盛遠トテ、

(巻五「文学高尾山神護寺勲進事同流罪事」)

伊豆に流されている「文学」こと文覚(一一三九〜一二〇三)も、当地で頼朝と邂逅して旗揚げを勧めた。諸本にも描かれている周知の場面である。北面の武士出身の文覚も伽藍の大規模な建築工事を請け負う。工事は単なる建造物の修繕だけではなく、寺に安置されている絢爛豪華な仏像群の「造型」の品々を形成しているからには、莫大な資金と手間とを必要とした。その勲進に情熱をかたむけた非凡な英雄であった評されている。そのことは『愚管抄』別帖の八十二代後鳥羽天皇の条に「同三年三月十三日ニ法皇ハ崩御アル。」(巻六——二七八ページ)とし、後白河院の「仏法」へ入れ込んでいた模様を回顧して、その直後には、

殿下、カマ倉ノ將軍仰セ合セツ、世ノ御政ハアリケリ。ソノ始ニ、播磨國・備前國ハ院分ニテアリシヲ、上人二人ニタビテ、「成モヤリ候ハヌ東大寺イソギ造営候ベシ。東寺ハ弘法大師ノ御建立、鎮護国家無ニ左右一候、寺モナキガ如クニ成リ候ツクラレ候ベシ。其二過タル御追善ヤハ候ベキ」トテ、東寺ノ文学房、東大寺ノ俊乗坊トニ、播磨ハ文学、備前ハ俊乗ニ給ハセテケリ。東大寺ニハモトヨリ周防國ハツキテ有ケレド、事モナリヤラズトテ加ヘ給ハル、也。文学ハソノカミ同ジ国ニ流サレテアリケル時、アサタユキアイテ、仏法ヲ信ズベキヤウ、王法ヲオモク守リ奉ルベキヤウナド云聞セケリ。カクテハツベキ世中ニモアラズ、ウチ出ル事モアラバナド、アラマシ事モ約束シケルガ、ハタシテ思フマ、ニ叶ヒニケレバ、高雄寺ヲモ東寺ヲモ

ナノメナラズ興隆シケリ。文学八行ハアレド学ハナキ上人ナリ。アサマシク人ヲノリ悪口ノ者ニテ、人ニイハレケリ。天狗ヲマツルナドノミ人ニ云ケリ。サレド誠ノ心ニカカリケレバニヤ、ハリマヲモ七年マデシリツ、カクコウリウシケルニコソ。

(卷六——二七八〜二九七ページ)

と叙述した。後白河院崩御後の治世は、施線部で執政の「臣」の九条兼実と鎌倉幕府を領導している頼朝と連携していく治世の新展開であると批評している。要するに現今からの「王法」の模様を摘記したわけであった。次の波線の二人とは重源と文覚であつて、以下では伽藍造営すなわち西山義の開祖の證空が説く建築の「造型」に尽瘁していった模様を詳述しており、「仏法」の興隆へ及ばせていく。そこで流罪された文覚が、同じく流人の頼朝に旗揚げを勧めて二重施線部のように「仏法を信じ、王法を守護する」ことを求めたとの言辞を慈円は象嵌したのであつた。第二節に掲出した別帖の八十一代安徳天皇の条の、

但コレハヒガ事ナリ。文覚・上覚・千覚トテグシテアルヒジリ流サレタリケル中、四年同ジ伊豆国ニテ朝夕二頼朝ニ馴タリケル、ソノ文覚、サカシキ事ドモヲ、仰モナケレドモ、上下ノ御ノ内ヲサグリツ、イ、イタリケルナリ。

(卷五——二五一〜二五二ページ)

と照応している。この文章では、『治承物語』の旗揚げの顛末を施線で事実でない<sup>1</sup>と注記し、二重施線にあるように後白河院をはじめ当時の廟堂の貴顕や平家一門の内情をもとに旗揚げを頼朝に文覚自身<sup>2</sup>が勧めたと批評した。史論の中核となる仏法王法相依の道理に則つて叙述している。同時に既に慈円圏で「あそび心」から創出させた本物語との相克が看取されもすることになつてこよう。そのことは證空が、

佛法八王法ヲ背カズ、王法ニ依リテ佛法アル事ヲ釋スルナリ。

(『観経疏自筆御匠鈔』序文義・第二)

と記載しているのが明徴となるからに他ならないのである。前掲した八十二代後鳥羽天皇の条の破線部にある「アサマシク人ヲノリ悪口ノ者」とは、文覚の「強引な勧募」であつた。それが昂じて後白河院の御所へ侵入して「勧進帳ヲ取出シ、高ラカニコソ説」んだので入獄され、伊豆国へ流罪されたと描かれていくことになつた(『屋代本・卷五』文学高尾山神護寺勧進事同流罪事)。この言行は事実と呼応しており、「身命を賭して実現した神護寺の再興、

東寺の修繕など」をしたので「怪僧文覚」と呼ばれていたからなのである。<sup>23)</sup>

重源は建久二年(一一九一)頃に東大寺の大仏殿に観経曼荼羅と浄土五祖像等の絵画・彫刻・工芸等の「造型」品を懸けて、その前に源空を請じ入れ、浄土教を講説して貰っていた。<sup>24)</sup>重源の勸進姿勢は、文覚と同様に證空の彫刻・建築・工芸等の「造型」が衆生を救うという信仰心に通じている。

慈円圈に参画していた時期と重なる建保三年(一一二五)九月十三日の「内大臣家百首」に、

里の名を身にしる中のちぎりゆ糸枕にこゆる宇治の河波

(一一六七)

と詠じた歌は、『源氏物語』(浮舟巻)の「里の名をわが身に知れば山城の宇治のわたりぞいとど住み憂き」を本歌にし、さらには、

小塩山

あさしももしらゆふかけて大原や小塩の山に神まつるころ

(一一二二)

『伊勢物語』(七六段)の「大原や小塩の山もけふこそは神代のことと思ひ出づらめ」をもとに大原野社の祭りには白木綿をかける修辭を凝らしている。既述したように一二五二番歌は、慈円圈の空間そのものを定家は視野に入れて詠じたことになるであろう。慈円圈とともに『治承物語』の創出に参画していた蓮生との贈答歌が二条為世の撰『新後撰和歌集』に入っている。すなわち、

下野国にまかりける人に

たちそひてそれとも見ばや音にきく室の屋島のふるき煙を

(三八三〇)

返し

蓮生法師

おもひやる室の屋島をそれと見ば聞くに煙のたちまさらん

であつて、一二五二番歌では我が嫡子の為家の舅である蓮生が東国の下野国へ下向する際に歌を手向けていたわけだが、蓮生も我が宇都宮家の下野にある清水の水が蒸発して煙のように見えてくると和した。当該歌の「室の屋島」は下野国の歌枕で、『詞花和歌集』の長徳四年(九九三)、陸奥国守として赴任中に卒去した藤原実方の歌に、

## 題不知

藤原実方朝臣

いかでかは思ひありともしらすべき室の屋島の煙ならでは

(二六八)

があつた。一六八番歌は、「どうして心に思ひの火があることができようか、できはしない、室の竈かまどの煙のような目に見える煙ではなくては、と情趣の感じられる」との意味であるからには、本歌取りの修辞を凝らして蓮生も詠じたのであつた。

宇治川先陣譚に立ち戻つてみてみよう。

四部本の「橋合戦」(巻四)には、「馬筏」という坂東武士の戦法が、

強き馬をば上手に立てよ。弱き馬をば下手に立てよ。肩を並べて手お取り組み、前の馬の尾に取り付かせよ。

遠き者をば弓の弭に取り付かせよ。太多が力を一つに為べし。馬の足及ばん処をば、手綱を免し歩ませよ。

馬の足却まん処をば、手綱に救ひ游がせよ。頭拳がらば前輪に懸かれ、頭沈まば三頭に乘れ。(以下略)

と描かれたのは、院政期になつて勸進が広く庶民に受け入れられ、聖があらゆる領域に進出して「橋や鐘の造修築」に威力を発揮したからでもあつた。<sup>25)</sup> 国家管理の橋でも実態は同じであつた。当時、激流の宇治川に恒常的に設けることは不可能であり、宇治川の橋の維持は院政期からは勸進聖によつて担われていた。六卷本『治承物語』を祖本が書写された延慶二・三年より半世紀遡つた弘安七年(二二八四)二月二十七日、この宇治橋の再興を命じる旨の太政官符を得て叡尊は造営を始め、同九年(二二八六)十一月十九日に竣工をみた。宇治橋に設けられている網代という常置網を発願した叡尊が、壇越に殺生禁断を勧めたことに応じるものであつた。宇治橋の東詰め<sup>26)</sup>に建立されている橋寺放生院は「宇治橋、および橋の完成を記念して叡尊が橋の上流の中州に漁船・漁具を埋めて造立した浮島十三重石塔の管理・維持を行う寺院としての役割」をはたしていくこととなつた。建築する「造型」は衆生を救済するとの西山義の信仰と照応している。

文治二年(一一八六)八月十五日、平等院室院に就いて慈円が、翌年に詠作した「堀川百首」で、

年を経て瀬々の網代による水魚をあはれとや見る宇治の橋姫

(二六三)

宇治川の橋に祀られている橋姫が毎年の冬に網代漁を見守っていると詠じた。叡尊の宇治川の橋の竣工と宇治川の中州に造立した寺院に籠もる信仰とは軌を一にしている。

慈円圏の文事に定家が参画していく三年前の建永二年（二〇六）六月に慈円と共に最勝四天王寺名所御障子歌には、

宇治河

網代木や波のきりまに袖見えて八十宇治人は今かとふらむ

（二八四〇）

網代木に寄せる波から立ち昇る霧の間に袖がちらちらと見えて、宇治に住む多くの人々は今訪れるであらかとの歌が入っている。慈円周辺圏の文事に参画していく十三年前の嘉禄元年（二三五）二月十六日には、昨年十一月より始めた『源氏物語』全巻の書写を終了しており、薫と浮舟とが連れ添って小舟で川を渡る場面の巻をはじめとして宇治十帖の描き出した宇治川とその周辺の物語を定家は知悉していたからなのである。

後鳥羽院が宇治方面へ好んでよく御幸していた。元久元年（二〇四）七月十一日より十六日まで院の滞在のために定家が奔走している事実があった。同月十四日条の『明月記』には、

十四日。天晴る。院に参ず。水練のため、川上におはします（去る十日、又此の如し）。諸人裸形にて、平等院の前庭を渡る。又裸にて馬に乗る（鞍を置かず）。行列の躰、密かに目を驚かす。

と記載している。水練のために裸体で宇治川を人が馬に乗っている情景を眺めていた。翌日にも、

十五日。天晴る。院に参ず。今日宝蔵を御覧するなり。午終許りに御幸（御輿。公卿・侍臣騎馬す（公卿少々輿にて先陣）。西の大門を入りおはします。（中略）北の大門より、還りおはします。入りおはしますの後、退下して殿に参ず。左衛門督（御馬二疋を相具し（北面の者、四人之を引く）、参入す（二疋に鞍を置く）。御対面あり。御馬御隨身之を請け取る。即ち又御院参。笠懸けを見物と云々。

とあって、後鳥羽院に随行した定家は、施線にあるように院の輿の前を守る馬に乗っている様子を捉え、殊に二重施線で二疋の馬を引くとした後に圈点を付したように馬を「北面の者、四人之を引く」と記載している。院の御所の守護する北面の武士の存在が、定家の思念では宇治川先陣譚の梶原景時と景季そして佐々木四郎高綱等に

従属した「雑人」と重なりもするであろう。この『明月記』の記載の事実より七年後、承元四年（二二〇）頃から『治承物語』を慈円は企画・創出させていく。慈円圏で定家の文飾も宇治川先陣譚にあり得たはずである。この十年後の承久二年（二二〇）に、定家は我が嫡子の為家の正妻に宇都宮入道蓮生の娘を選んだ。建保末年から承久三年（二二八〜二三二）に『愚管抄』別帖に『治承物語』を取用して時宜相応に移りかわっていく道理を慈円は説くからには、西山に慈円圏で蓮生そして西山義の開祖となっていく證空とも協議しながら、定家は宇治川先陣譚の枠組みを構成していった。

### 第五節 『平家物語』初期生成と『将門記』の受容——まとめ——

宇治川先陣譚での「先陣」そのものをめぐっては、『吾妻鏡』元暦元年（二一八四）二月一日条に、

一日 庚申 蒲冠者範頼主 御気色を蒙る。これ去年の冬、木曾を征せんがために上洛するの時、尾張國墨俣の渡りおいて、先陣を相争ふによつて、御家人等と鬭乱する故なり。その事、今日すでに聞しめすの間、朝敵追討以前に私の合戦を好むこと、はなはだ穩便ならざるの由仰せらると云々。

東国から義仲征伐のために上洛した時に長良川で御家人達が先陣を競ったことを聞いた頼朝は朝敵追討の以前、互いに争つたのは穩やかでないと言つたと見える。ところが、「生ずきの沙汰」の章段では、第一節に掲出したとおり、

「高綱ぞ先を為つらん」と頼朝は思食されけり。「佐々木史郎高綱、宇治河の先陣」とぞ、執帳に書かれける。と描かれており、史実と物語との相違があるのは留意せねばならない。『治承物語』は「頼朝の物語」であつたからなのである。この味方同士の長良川での乱闘は『玉葉』同年正月六日条に、

或人云はく、坂東武士已の墨俣を越え美乃に入り了んぬ。義仲大に怖威を懐くと云々。とあり、第二節に掲出したように同月二十日条では、

二十日庚戌。天晴。物忌なり。卯の刻人告げて云はく、東軍已に勢田に付き、未だ西地に渡らずと云々。相次ぎ人云はく、田原の手已に宇治に着くと云々。(中略) 敵軍已に襲ひ来たる。仍つて義仲院を棄て奉り、周章対戦の間、相従ふ所の軍僅に三十四騎、敵対するに及ばざるに依り、一矢をも射ず落ち了んぬ。と記載した兼実は、翌二月三日条に、

三日壬戌。法印(慈巴)来らる。

としており、宇治川先陣譚の背景を記主である兄の兼実と慈円はつぶさに語り合つたと筆者は推定したのであつた。『治承物語』の平家一門の落ちで、平貞能が、

我身乗替一騎具テ、宇都宮ノ左衛門ニ打ツレテ、平家ト後合ニ、東国ヘコソ落行ケレ。

(屋代本・巻七「平家一門落都趣西国事」)

東国へ下向していく場面に描かれた施線の宇都宮朝綱の孫の宇都宮入道蓮生は『平家物語』初期生成に深く関わる人材であつた。<sup>27)</sup> 東国の下野国の空間は前掲の第一節の『将門記』に「先づ下野国に渡る。」(二五)・「便ち下野国より」(二三)・「下野押領使秀郷等」(二六)等と「下野国」があり、良兼の軍勢と合戦をめぐつて、

人馬は膏肥し、干戈は皆具そんたはれり。将門は度々の敵に搦とりひがれ、兵具已に乏しく、人勢厚からず。敵は之を見て、垣の如くに楯を築き、切するが如くに攻め向ふ。将門未だ到らざるに、先づ歩兵を寄せ、略合戦ぼくごせしむ。

且かつ射取る人馬は八十余人なり。彼の介大いに驚き怖ぢて、皆楯を挽きて逃げ還る。将門は鞭を揚げ名を称へて、追ひ討つの時、敵は為方せんたを失ひて府下に偪いりこ仄る。

(一五)

と描いていた。すなわち、良兼勢は人馬ともに疲れしらず、あぶらものつており、風の如く疾駆し鳥の如く飛び込んでくる。そこで敵が近づかないうちに、将門は声をはりあげ、先手を打って歩兵を出して自ら敵中へ突入したので、良兼勢は驚き、怖し氣づいていつせいに楯を引いて退却した。合戦に決着をつける。下野の国府に逃げ込んだ良兼は将門あえて討ち取ろうとはしなかつた。その代り、

件の介の無道の合戦の由を、在地の国に触れて、日記し已に了んぬ。

良兼が道にはずれた戦いを仕掛けてきた由を周辺に触れまわり、その経緯を下野国の役所の日記に記して後日の証しとして記録して引揚げたとあった。これは掲出した四部本の章段「生ずきの沙汰」の末尾の一節に、宇治河の先陣を為けり。宇治の手落ちぬと聞こえければ、「高綱ぞ先を為つらん」と頼朝は思食されけり。「佐々木四郎高綱、宇治河の先陣」とぞ、執帳に書れける。

とある。圈点の「執帳」に記載したと頼朝を描いた趣向と同一なのは明白なのである。さらに、

新皇勅して曰く、「女人の流浪は本属に返すは、法式の例なり。又、鰥寡のやもめ孤独のひとりひとに優恤を加ふるは、古帝の恒範なり」と。便ち一襲を賜ひて、彼の女の本心を試みむが為に忽ちに勅歌有りて曰く、

よそにても風の便りに吾ぞ問ふ枝離れたる花の宿りを

(二〇)

将門は対戦の相手である平貞盛の妻を返してやるのは法の慣例であるし、身寄りのない老人・孤児に恵みを与えるのは昔の帝王の行ってきた規範だと述懐しつつ、貞盛の妻に即座に「遠く離れていても香りを運ぶ風の便りによつて、枝を離れて散つた花のありかを尋ねもとめることができる。同じように、人々の噂によつて、散る花のように夫のもとを離れて寄る辺のないあなたを案じている」と温情ある歌を詠じたと描かれていた。当該歌は、藤原清輔(二〇四〜二七七)が著作した歌学書『奥義抄』の「序」に、

平貞盛がめとられて、陣にありと聞きてきぬをおくるときの歌

よそにてもかぜのたよりに我ぞとふえだはなれたる花のやどりは

と取用されている。慈円圈で『治承物語』が企画・創出される前年の承元三年(二〇九)、定家は三代鎌倉將軍の源実朝の求めに応じて書き送った歌論『近代秀歌』の冒頭の「前文」に直結させた「和歌史批判」の箇所で、

昔、貫之、歌の心巧みに、たけ及び難く、詞強く、姿おもしろきさま好みて、

(二一)

紀貫之は趣向の立て方が巧妙、声調の張りがあり、詞のあらわす意味が明解なので歌の一首全体に面白みを感じられると説き起こし、時代が下ると歌人の心が劣り声調の緊張感も不十分になっていき、「商人の鮮衣を脱げるとが如し」と論難した。「平俗になってしまった」と記しているものの、その直後では、

然れども、大納言経信卿・俊頼朝臣・右京大夫顕輔卿・清輔朝臣・近くは亡父卿、即ちこの道を習ひ待りける基俊と申しける人、このともがら、末の世の賤しき姿を離れて、つねに古き歌をこひねがへり。この人々の思ひ入れて秀れた歌は高き世にも及びや侍らむ。

父の俊成をはじめとして六人の歌人に清輔をも数え上げて、理想的な古典的歌風に劣っていないと讃嘆してもいい。歌論を閉じるにあつての「付言」で、

人々の書き集めたる物に変わることなき侍れば、はじめて記し出出すに及ばず。〔五〕

これまでの私見は何ら変わりばえしないとの恭謙卑遜な言辞を添えた。さらに「秀歌例」の項をもうけて、清輔の、

冬枯の森の朽葉の霜の上に落ちたる月のかげのさやけさ (六〇七)

君来ずは一人や寝なむさきの葉のみ山もさやく霜夜を (六一六)

ながらへばまたこの頃やしのはれむ憂しとみし世ぞ今は恋しき (二八四三)

『新古今和歌集』に採った三首を挙げており、殊に一八四三番歌の意味は、若しこの世に生きながらえるならば、この辛いことの多い現在がまた懐かしく思い出されるであろうか、あの辛かった昔が、今になってみると、恋しく思われるからだと、「時間」の推移を詠んだのであった。しかも定家が編んだ『百人一首』に採った周知の歌である。慈円周辺圏が組織される頃より十年以前の嘉禄二年八月(二二二六)八月に著した歌学書『僻案抄』では歌句の注釈・出典の指摘・史的事実の考証などをおこなっている。貞応元年(二二二二)九月七日の奥書がある歌学書『三代集之間事』では、『古今和歌集』・『後撰和歌集』・『拾遺和歌集』をめぐっての見解を披歴していた。定家は両書を『奥義抄』を参照しつつ著している。<sup>28)</sup>

『将門記』の受容をめぐって第一節で論じたことに則りながら、慈円周辺圏の文事を確認しておこう。

慈円周辺圏で嘉禎三年(二二三七)から仁治元年(二二四〇)頃に六巻本に『治承物語』を再編させる。それを祖本としている延慶本には、

朱雀院御時、承平年中ニ、平将門、下総国相馬郡二住シテ、八个国ヲ押領シ、自ラ平親王ト称ジテ都へ打上ケリ。

との一文より始発させて、平貞盛が将門追討の宣旨をうけ、節刀・鈴を賜つて儀式正しく出発、将門を討ち、

九条殿ノ御末ハ、今マデ撰政絶サセ給ワズ。(中略) 朝敵ヲ平グル儀式ハ上代ハカクコソアンムルニ、維盛ノ撃手ノ使ノ儀式、先蹤ヲ守ラヌニ似タリ。「ナジカハ事行ベキ」トゾ、時人申合タリケル。

(二末・二二「昔シ将門ヲ被追討」事)

と括った。本章段では平維盛の富士川の敗走への伏線であつた。同時に慈円の兄の兼実が我が日録の『玉葉』治承四年(一一八〇)九月三日条で頼朝を「宛も将門の如しと云々」と批判していた。だが頼朝が鎌倉幕府をひらき、第二段に掲出したように『愚管抄』で慈円が「殿下、カマ倉ノ將軍仰セ合セツ、世ノ御政ハアリケリ。」(巻五―一五二―五二ページ)としていた治世から半世紀近くの歳月が経過した頃に、延慶本の祖本である六卷本『治承物語』が成立する。石橋山の合戦で敗退した後、富士川を隔てた平家軍と対峙した治承四年(一一八〇)十月から六十四年後であつた。延慶本の最末尾の源頼朝の章段である「伊豆国蛭方小島へ被レ給シ時ハ、カクイミジク果報目出カルベキ人トハ誰カハ思ヒシ。我身ニモ思知給ベカラス。」(六末・三九「右大将頼朝果報目出事」)の言説に照応するものも至当であろう。<sup>29</sup>延慶本の施線部「九条殿ノ御末ハ、今マデ撰政絶サセ給ワズ。」の言辞から慈円を大叔父とする執政の「臣」である九条道家が主導している慈円周辺圏の文事であることを如実に露呈していよう。要するに慈円周辺圏とは『治承物語』を六卷本に再編する文事のことである。この文事は、八十四代四条天皇の外祖父の道家が主導した。定家も六卷本『治承物語』に文飾していく。他方、貞盛の悲嘆や妻が将門の歌に和しているので、原初本『将門記』は東国で成立したあと、京で増補されたのであつた。<sup>30</sup>次に『将門記』と『治承物語』そして六卷本への再編されていくまでの文事を辿りなおして本稿を括ることにしたい。

慈円が企画して創出させた『治承物語』の宇治川先陣譚は『将門記』が描いた鏝迫り合いに近いもので、四部本の「宇治川」・「生ずきの沙汰」の二章段に近似していたであろう。すなわち、

佐々木四郎高綱と梶原源太景季、心中にて先を諍ひける間、馬の鼻を並べて打ち入れけり。之を見て畠山も追ひ入れぬ。二万五千余騎、我もくと渡しければ、水は堰かれて上へ登りければ、雑人共輒く下手を渡しけり。漏る水に何かなる物も手留らずして押し流さる。迎への岸へ着く処に、梶原源太が馬は、繩に頸を懸けて押し流されて、遙かの下より拳がりけり。佐々木四郎が馬も繩に頸を懸け、れども、太刀を抜きて繩を打切り、一番に樋と拳がる。

先陣そのものを括った。六巻本『治承物語』の延長線上にある延慶本では、施線部の佐々木四郎高綱の行為そのものを詳細な言動に変更して描いていく。すなわち、

佐々木四郎、先陳係かひテ申ケルハ、「人ヲバシラズ、高綱方郎従等、能々心ニ用意セヨ。事モナノメニ思テ不覚スナ。ツヨキ馬ヲバヲモテニ立ヨ。ヨハキ馬ヲバシタテニナセ。敵ハイルトモ、河中ニテ答ノ矢イムトテ不覚スナ。射向ノ袖ヲ顔ニアテ、シコロヲチカタムケヨ。(中略)ラムグキアラバ、逆向木アリト思ベシ。波ニハラムト手綱ヲスクヘ。イタクスクヒテ引カヅクナ。渡セヤク。ツヨクノレ。鎧フムバレ。立アガレ」トテ、マ十文字ニザツト打ワタシタリ。渡シハテケレバ、箆ノホウダテ打タ、キ、紅ノ扇ヒラキ仕テ、「音ニモ聞ラム、目ニモミヨ。佐々木四郎高綱、宇治河先陳渡シタリヤ」トゾ名乗ケル。

であつて、内容は第一節に前掲した『古今著聞集』(三四三)の「武勇」の「承久三年のみだれに、宇都宮越中の前司頼業、未だ無官なりけるが、宇治川を渡すとして押しながされて、水の底へ入りたりけるに、……」のような説話の話柄をも絡ませ、四部本の「橋合戦」(巻四)の後半に近い本文に基づきながら、捉えていった。

第一節に引用した『言泉集』(忌日帖・三帖之二)の「金光明経功用事有之」に、

將門合戦章云干時寄セ中有之使二所告一消息云、將門作悪ツクル之時催テ伴類ツカヲ一以成ス犯ヲ一受報之日蒙テ諸罪ヲ一以独苦也

圈点を付したとおり「將門合戦章」すなわち『將門記』を引用している。聖覚(二一六七〜二三三五)が撰定した表白・願文等の要文書の『言泉集』についての特質を、

適切にして具体的な名文がたくみによみ上げられる時にはまず満座をさそい、本尊を始め、諸仏の冥鑑もまたこれに応じて、歴然たるものありとみな信じたのである。承安四年（一二七四）澄憲が祈雨の功によつて小僧都より大僧都に任ぜられたことが……と説明されている。<sup>31)</sup>

聖覚の父の澄憲（二二六〜二〇三）は四部本の「新院崩御」（巻六）に、

澄憲法印、山より下りたまひて、静閑寺に煙の立つを見奉りければ、「葬送ぞ。何かなる人ならむ」と問ひけるに、「新院崩御なりける間、彼の御煙なり」と申しければ、「阿那、糸惜し。呼は何かに」とて、

常に見し君が御幸が今日よりはかへ返らぬ旅と聞くぞ悲しき

とて、思ひ連けゝるとかや。

治承五年（一一八〇）正月十四日に高倉院崩御、静閑寺へ移され、澄憲は空しく煙となつた院悼んで詠歌したと描かれている。当該歌は『千載和歌集』（巻九・哀傷）に、

二条院かくれさせ給うて御わぎの夜よみ侍り

法印澄憲

（五八九）

つねに見し君がみゆきをけふ問へば帰らぬ旅と聞くぞかなしき

二代前の二条天皇が崩御した時の歌をそのまま転用した。とするならば、先行研究の、『言泉鐘樓経蔵』を含む多くの安居院流の唱導書が『平家物語』の作者の机上にあつたことは容易に想像される。

との言説は看過できない。<sup>32)</sup> それは、次の理由からであつた。すなわち『愚管抄』別帖の八十二代後鳥羽天皇の条に、同三年三月十三日二法皇ハ崩御アル。マヘノ年ヨリ御ヤマイアリテ、スコシヨロシクナラセ給ナドキコヘナガラ、大腹水宵ト云御惱ニテ、御門眼ノ前日マデ御足ナドハスクミナガラ、長日護摩御退転ナクヲコナハセヲハシマシケリ。（中略）殿下、鎌倉ノ將軍仰セ合セツ、世ノ御政ハアリケリ。

（巻六——二七九ページ）

との文章が記された。後白河院の崩御後は執政の「臣」の九条兼実と幕府を領導している頼朝とが治世を推進していく時運と慈円は揚言し、仏法王法相依の道理から「王法」の新展開の始発となったと叙述したからである。それ故に院の崩御の三日後に定家は、はじめて『明月記』建久三年（二一九三）三月十六日条に、

御前の僧十三口、護摩師定を加ふるなり。勝賢（護摩）・澄憲・良縁（中略）聖覚……

とあって、院のための追善供養に父の澄憲と共に聖覚が参列していた「仏法」の側のことを記した。この時の条より以降の『明月記』には「聖覚」が八十余例に亘って頻出していく。慈円周辺圏の文事がなされ始められた嘉禎元年（二三五）二月十八日条には、

聖覚法印不食の病、今日以後殊に無力、遂日弱る由、昨日聞き及ぶと雖も、今日向ひ訪ふべき由、隆承法印に示す。

憂愁の心で定家は最晩年の聖覚をつぶさに見舞っており、翌月五日条に、

法印遂に事切れ給ふと云々。日来聞くと雖も、臨むに由無し、悲しみて余り有り。

と聖覚の死去を記した。三十一歳頃から七十四歳までの四十余年の長い歳月に亘って定家は緊密な親交を結んでいた。「頼朝の物語」を内実とする『治承物語』を創出させる慈円圏の文事が始まる二年前の承元二年（二〇〇八）十月二十四日には、

法会の儀式、童舞等嚴重。呪願（成巴）・導師（聖覺）・樂行事伊時朝臣（中略）導師布施、

とあって、法会の導師を勤めた聖覚が布施を貰いうけている模様をも記載していた。定家書写の延応二年（二二〇〇、同年七月に仁治に改元）七月十一日付消息に刻まれた『兵範記』紙背から六卷本『治承物語』の存在が確認される最新の解説では、二条忠高が九条道家ないしは子の教実に宛てたもので、九条家との関連から重視されねばならない<sup>33)</sup>。それ故に慈円周辺圏に定家は参画していた証憑となつてこよう。

定家は『近代秀歌』で藤原清輔を称揚している。清輔の『奥義抄』に『将門記』が載っている歌を記載している。清輔を介してでも『将門記』を披読した定家は、出自である東国の動向と「武」の側面を景時の姫を妻にし

ている宇都宮入道蓮生とも協議しながら、宇治川先陣譚に彫琢をくわえたと推定したい。<sup>94)</sup>

〔末尾〕

〔引用資料の典拠〕

- 『愚管抄』は『日本古典文学大系』（岩波書店）、『玉葉』は高橋貞一著『訓読玉葉』（高科書店）、『明月記』は今川文雄『訓読『明月記』、定家の和歌は『藤原定家全歌集』（筑摩書房）、慈円の歌類は『拾玉集』（明治書院）、『詞花和歌集』は工藤重矩校注『詞花和歌集』（岩波書店）、『千載和歌集』は久保田淳校注『千載和歌集』（岩波書店）、『将門記』は『新編日本古典文学全集』（小学館）、『奥義抄』は『日本歌学大系』（風間書店）、延慶本『平家物語』は『校訂延慶本平家物語』（汲古書院）、屋代本『平家物語』は『屋代本高野本対照・平家物語』（新典社）、四部本は『訓読四部合戦状本平家物語』（有精堂）、定家の歌は『藤原定家全家集』（筑摩書房）、『玉葉』は『訓読玉葉』（高科書店）、『吾妻鏡』は『全釈吾妻鏡』（新人物往来社）、『千載和歌集』は久保田淳校注『千載和歌集』（岩波書店）、『新古今和歌集』は『日本古典文学全集』（小学館）、『古今著聞集』は『新潮日本古典集成』、『言泉集』は『安居院唱導集 上巻』（角川書店）。

註

- 〔1〕拙著「第Ⅱ部 第八章 治承物語の復元」（『愚管抄の言語空間』汲古書院・二〇一四年）
- 〔2〕註の〔1〕で『治承物語』を見据え、意匠を疑らず、『新古今集』の歌人によって深められた技法の「本説」取りでは、典拠を自己菜籠中ものとしていく。（三六四ページ）と筆者は論じた。
- 〔3〕『吾妻鏡必携』（吉川弘文館・二〇〇八年）六ページ
- 〔4〕水原一は、八坂本の屋代本とともに「百二十句本」はそもそも古流につながるの深い「八坂流」の古本という評価を得ているものである。（中略）重要視される一本である。」としている（『平家物語 下』解説（新潮社・二〇〇三年）四一五ページ）
- 〔5〕安藤次男著『藤原定家』（講談社・一九九二年）一四八ページ
- 〔6〕註の〔1〕の同書「第Ⅱ部 付章補論 物語化される梶原景時」
- 〔7〕『将門記 2』（平凡社・一九七六年）三七一ページ

- [8] 『四部合戦状本平家物語全釈 巻六』(和泉書院・二〇〇〇年)二〇三ページ
- [9] 『第二章 平家物語の成長』(『平家物語研究』角川書店・一九六四年)一八八ページ
- [10] 註の〔1〕の同書「第II部 第八章 補論「あそび心」と今様」
- [11] 註の〔10〕と同じ。
- [12] 水原一も「第三部 説話的関連」(『延慶本平家物語論考』加藤中道館一九七四年)で「四部合戦状本の如き、編年的記述を貫き、挿入説話の類の極度の少ない本文を以て平家諸本の最古態」(二八三ページ)として、延慶本の説話文学性について、宇治川先陣譚にも「佐々木説話」が関与し「本来明朗な先陣争いの諸本の形が、延慶本にそうした後世の感情が投影して、悪どい発展を示したのだと説明はなし得るかもしれない」(三七六ページ)と論じている。このことは留意せねばならない。さらに後述したい。
- [13] 『四部合戦状本平家物語 巻九』(和泉書院・二〇〇六年)三〇三ページ
- [14] 註の〔13〕の同書三二〇ページ
- [15] 『第五章 梶原景時と頼朝の雑色』(『頼朝の精神史』講談社・一九九八年)一六七〜六八ページ
- [16] 『第二章・第三節 景時の教養』(『日本中世水軍の研究——梶原氏とその時代——』錦正社・一九九三年)四四ページ
- [17] 註の〔1〕の同書「第II部 付章補論 物語化される梶原景時」
- [18] 『序章 第二節 日本中世の戦争の実態』(『院政期武士社会と鎌倉幕府』吉川弘文館・二〇一九年)一〇ページ
- [19] 『第七 源平合戦と常胤』(『千葉常胤』吉川弘文館・一九七三年)一八八ページ
- [20] 註の〔19〕の同書「第三 在地領主の成立在地」九二ページ
- [21] 中西随功著「第一章 第四節 證空の造形と信仰」(『證空浄土教の研究』法蔵館・二〇〇九年)
- [22] 『第一編 第一章 文覚の生涯』(『山田昭全著作集 第五巻 文覚・上覚・明恵』おうふう・二〇一四年)
- [23] 註の〔22〕と同じ。
- [24] 小林剛著『俊乗房重源の研究』(有隣堂・一九八〇年)一七ページ
- [25] 五味文彦著「第三章 第三節 経・鐘・橋」(『院政期社会の研究』吉川弘文館・一九八四年)二二二〜一三三ページ
- [26] 細川涼一「鎌倉仏教の勸進活動——律宗の勸進活動を中心に——」(『論集 日本仏教史 4 鎌倉時代』雄山閣出版・一九八八年)
- [27] 註の〔1〕の同書「第II部 付章 宇都宮入道蓮生の位置」
- [28] 川平ひとし「『僻案抄』書誌稿(一)」・「『僻案抄』書誌稿(二)」(『跡見学園女子大学紀要』第十六号・第十七号、一九八三年三月・一九八四年三月)・「『三代集之間事』読解」(『跡見学園女子大学国文学科報』第十一号・一九八三年三月)

- [29] 武久堅は「延慶本の終章に讃える頼朝像に見事に照応することになる。」と論じている「第一編 第五章 『将門記』 依拠の段階」(『平家物語成立過程考』桜楓社・一九八六年) 一四〇ページ
- [30] 渥美かをる著「一 将門記・将門略記についての一考察——とくにその成立をめくって——」(『軍記物語と説話』笠間書院・一九七八年)
- [31] 「解題」(『安居院唱導集 上巻』(角川書店・一九七二年) 四八〇ページ)
- [32] 清水宥聖「言泉集の位置——雑談集・平家物語において——」(『国文学踏査』第八号・一九六八年二月)
- [33] 註の「1」の同書「第二部 第九章 再編された六卷本治承物語と九条道家」
- [34] 『玉葉』正治二年(一一二〇)二月二日条に「景時討伐必然と云々。天下の悦びなり。積悪の輩、数を尽し滅亡す。」とあって、九条兼実(景時一族への指弾をして「負」の評価であるの対して)定家は、我が日録『明月記』同月二日条に「人云ふ、景時已に討たれ了んぬと云々。」とある。しかも慈円(徳大寺実定)が創出された徳大寺実定(源頼朝)と同じ形象をしており、頼朝の旗揚げを描く直前に布置されている屋代本「月見」の章段への伏線であったことを論じた(拙稿「今様をうたう徳大寺実定の意味——屋代本『平家物語』から——」(『熊本学園大学 文学・言語学論集』第四九・五〇号合併号・二〇一九年六月)。小井戸守敏は景時と「藤原定家との交友」を指摘している(『仮名『曾我物語』における梶原景季について」(『筑波大学平家部会論集』第七集・一九九三年三月)。註の「6」と同書の「物語化される梶原景時」。梶原景時・景季を慈円(徳大寺実定)と同一の視座で定家は把握していたのであろう。